科目区分：FD シンポジウム

授業改善シンポジウムに参加して

国語教育・東賢司

１．シンポジウム概要と感想

平成 27 年 12 月 10 日に授業改善シンポジウムが開催された。教務委員会内のＦＤワーキングリーダーの青井先生が中心になり、教育コーディネーターの担当者である冨田先生も加わって検討を進め、本年度のテーマを「教職実践演習」とすることに決定した。ワーキング内の仕事分担として司会を担当し、話題提供をお引き受け頂いた先生方のすぐ近くでお話をうかがった。先生方の熱意が伝わる特等席でメモを作成したが、これを元に、3 名の先生方の話題をまとめてみたい。多少の間違い・勘違いはあるかもしれないが、お許し頂きたい。

（１）池野修先生「教職実践演習」

池野先生は、教育学部の教職統括コーディネーターをされている。何でもこなせる先生であるが、事前打ち合わせで、教職実践演習の全体像をお話頂くようお願いすることになった。池野先生の話題の要点は以下のようなものがあった。

①教職実践演習は､｢力が付いたかを確認する｣授業である

②その基準は「教職課程の DP」に基づいている。

③｢実習科目群｣｢教職科目群｣｢専門科目群｣に分類して、教職実践演習は実施されている

・学生には『履修カルテ』の作成をさせているが、これには「リフレクション・ログ」「ラーニング・ログ」「プラクティス・ログ」の３つがある。

④2 年時～4 年時の学期末にリフレクション･デイを実施しているが､自己評価を行い、37 の項目を省察させている。

⑤教職実践演習の担当者は１クラス 40 名程度の学生を担当しているが、人数が不足している。

⑥課題としては､｢質保証を確認できる内容になっているかどうか｣｢教員負担の軽減（簡素化)｣等がある。

池野先生自身が話の中で「教職コーディネーターの引き受けてがいない｣｢今日は教職実践演習の授業を一緒にやってくれる人を捜しに来た」と言われていたが、教育学部の運営の責任者としての切実な問題と感じた。今後の教育学部や全学の教員免許を取得するために引き受け手を育成することも検討せねばならないのではないか。

（２）山﨑哲司先生「他大学の状況と教職実践演習の意義」

山﨑先生は、現在、教職総合センターのセンター長である。また日本教育大学協会の研究集会に長く参加され、他大学の先生方との交流を深めている。また、国立教育政策研究所のプロジェクト「教員養成教育における教育改善の取組―アクティブ・ラーニングに着目して―」に参画されている。今回は、教職センター長として、また、教大協等から得られる他大学の情報を紹介して頂くようお願いした。山﨑先生の話題の要点は、以下のようなものがあった。

①教職実践演習は「学びの軌跡の集大成」である。4 年間何を学んできたか、どのような力を身に付けてきたかを確認する授業、新しいものを学ばせる授業ではない

②教大協の集会では、教職実践演習を特任教授だけで実施している大学もあることが報告されている。

③学芸大学、宇都宮大学の取り組み例を紹介され、学級経営に関する授業を学部構成員全員が担当することになっているところもある。

④『履修カルテ』で困っていることが多い。答申があって教職課程の DP を作り､教職課程申請の手引きから作ったが、補習学習・補充学習のビデオ編集準備に長時間を必要とする

⑤教職実践演習は「身に付けている資質や能力を知る手がかり」となる。ポートフォリオを活用し、学修成果を参考にしながら点検を行うことが重要である。

山﨑先生も繰り返し述べられていた「教職

実践演習は何か新しいことを学ぶ講義ではなく、今まで学んできた事柄を確認する作業である」ということであるが、学生側からすると､「これまでの講義で学んでいないと何も出てこない」、また、教員の側からすると「重要であると教えたつもりでも、学生が理解していない、記憶していないと出てこない」ということになりかねない。そういう意味でも教職実践演習は「頭のなかを見透かす鏡」のような教科であると感じた。

（３）小田哲志先生「教職実践演習から見た学生の姿」

小田先生は、昨年度まで教育現場の先頭に立たれ、子どもだけではなく、教員の指導も行ってきた。現場経験豊富な先生にお願いしたことの一つは｢教職実践演習を担当されて、愛媛大学の学生に足りないものは何か」ということである。小田先生の話題の要点には以下のようなものがあった。

①「心に響く教師の言葉」にはどのようなものがあるか。
②「傷つける教師の言葉」にはどのようなものがあるか。
③教師生活の中では､「話す」ことがほとんどであり、この「話す」技術が愛大生は十分ではない。
④多様な体験が必要であり、それをアピールできることが重要である。教員採用試験の面接のやり方についての問題点

小田先生との事前打合せの際、先生が発言されていたことで印象に残っていることがある。愛媛大学教育学部の学生が教員採用試験を受けるときの様子である。教員採用試験の最難関の試験科目として「集団討論」があるが、以前から愛大の学生は点数が伸びないということが問題になっていた｡6 月～7 月には、教職支援ルームが中心となって講師の先生方をたくさんお迎えし、念入りに練習を重ねている。最終的には、どんな質問をしても答えられるようになったと思っていた。点数が伸びないのは、現役の教員のように現場経験がないので仕方がないと思っていたが、小田先生は「どれもこれも話す内容が同じで印象に残らない」と一刀両断された。教員採用試験は一人一人の資質を見抜く試験である。一つの大学の学生が同じ回答ばかりすれば、試験官である指導主事の先生方は違和感を覚えるのは当然であろう。教職実践演習とは直接関わることではないが、最短の道を通って教師を育成することについてのひずみが既に発生しているような印象を持った。

２．自らの授業改善の方策、計画

教職実践演習は、入学から卒業までに各専修・コースで学んだ講義が反映されていることが前提で講義が行われている。例えば、私が担当の講義で教示した内容について理解・記憶をしていれば記載ができるが、理解・記憶をしていなければ記載が出来ない仕組みになっている｡ある意味恐ろしい授業でもある。また、教職実践演習は学修成果を点検する科目であり、学生のなかで今までに受講した授業が羅列されているだけでは意味がないことも理解できた｡｢集大成｣の理解を更に深化させる必要がある。

学生達が記載するポートフォリオには、「指導方法に関する成果について」記載することになっているが、学担学生のポートフォリオには記載されていないことが多い。この状況は教員免許必修科目としては、失格であり、何らかの手立てを講じる必要があることを強く感じた。

現在、学部の新しいカリキュラムを実施する直前にある。学生達には、①教科に関する科目であっても、シラバスの中に「(子どもへの）指導方法（指導技術)」に関する目標を設定すること、②講義中に、毎回「指導方法のポイントを示すこと｣､③毎回の授業まとめや講義最終回のまとめの際に「最も重要な指導方法」について示すなど、授業の工夫が必要であると感じた。もちろんこれらが「なぜ重要なのか」を説明することも忘れてはならない。

また、講義の重要な部分について記憶が定着しているかを確認する手段も考えねばならない。重要点を絞り込み、対話のなかで繰り返し確認し記憶を定着する作業が必要である。

講義の進め方も大きく変える必要があることを痛感した。